放課後子ども教室のスタッフが抱える困り感と問題解決に向けての工夫
－都内Ｓ区の調査結果より－

藤後　悦子・岩崎　智史

Difficulties and solutions for stuffs in the after-school care program

Etsuko Togo and Satoshi Iwasaki

要旨

本研究は、小学生を対象とした放課後子ども教室のスタッフが抱える「困り感」と「問題解決に向けての工夫」について明らかにすることを目的とした。調査方法は、放課後子ども教室のスタッフ65名を対象に、自由記述を実施し、その回答内容を2名のもので分類した。その結果、「困り感」については、7カテゴリー29概念、「工夫点」については、9カテゴリー43概念に分類できた。今後の課題としては、スタッフの確保と人材育成、学校との連携、また保護者への啓発活動が挙げられた。

キーワード

放課後子ども教室、ボランティアスタッフ、困り感、問題解決

1. 問題と目的

近年子どもの自己効力感ややる気の低下が問題となっている。平成26年子ども･若者白書(内閣府)によると日本の若者は、自分自身に満足している者の割合が45.8％であり、アメリカ86.0%、イギリス83.1％、韓国71.5％と他国に比べて低い数値であった。また「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」は、日本52.2％、アメリカ79.3％、イギリス80.1％、韓国71.2％であり、これも諸外国と比べると低い結果となった。

このような問題を解決するためにも子ども達の自己効力感ややる気を高める方法として、社会的な体験が持つ力が注目されている。全国の20代～60代の男女5000人を対象とした国立青少年教育振興機構（2017）の「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」によると、子どもの頃、家庭の教育的･経済的条件に恵まれなかった人でも、「親や近所の人に厳しく叱られた経験が少なく、褒められた経験」が多かった人や「家族でスポーツしたり自然の中で遊んだこと」や「友だちと外遊びをしたこと」が多かった人は自己肯定感が高いことが示された。また、「外遊びを多くし、遊びに熱中していた人」ほど、社会を生き抜く資質・能力が高いことが明らかになった。

つまり、友達との外遊びや近所の人からの承認などが子ども達の成長に大きな影響を及ぼすのである。しかしこれらが近年子ども達の育ちの中で保障

されているとは言い難く、ゆえに社会教育への期待が高まっている。

社会教育として注目されているものが放課後子ども教室である。現在「放課後子ども総合プラン」として文科省の放課後子ども教室と厚労省の放課後児童クラブが連携して実施するよう推進されている。猿渡（2016）は、2007 年度より実施された「放課後子ども教室」と子どもの居場所に関する国の政策動向を次のようにまとめている。2006 年に教育基本法が改正され、2008 年に策定された教育振興基本計画では、体験学習の重要性が唱えられ、様々な活動を推進する施策が示された。続く 2013 年の第 2 期教育復興基本計画では、学校教育外において、体験活動が得られるような機会を設ける必要性が明記された。その後、中央教育審議会生涯学習分科会の下に、放課後及び土曜日の教育支援体制や活動の在り方について検討を行うワーキンググループが設置され、子どもの居場所について議論されてきた。

この流れと呼応するように、文部科学省は、2004 年から 2006 年まで緊急 3 か年計画として「地域子ども教室推進事業」を実施した。これは、現在の「放課後子ども教室」の先駆けとなるものである。地域の大人の協力を得て、学校を活用し、緊急かつ計画的に子どもたちの居場所を確保して、体験活動や地域住民との交流活動を促すものであった。その後、2007 年度より「地域子ども教室推進事業」を踏まえた取り組みとして、国の支援の仕組みを変更した補助事業である「放課後子ども教室事業」が創設された。

現在、放課後子ども教室は、全国で急激な広がりを見せている。平成 28 年度の全国公立小学校における実施率は、54.3％であり、実施教室は 16,027 教室にのぼる（文部科学省、2016）。

澤瀬（2017）は、地域の教育支援は学校を支え、学校が抱える複雑化・困難化した課題を解決するための大きな力となりうると述べている。そして地域の教育支援の質的な向上は、学校改善につながるであろうと放課後子ども教室に期待を寄せている。

S 区の放課後子ども教室の動向

S 区の放課後子ども教室は、国が「放課後子ども教室」事業を開始した 2007 年度にモデル校 6 校でスタートし、その後、2010 年度には全校実施が可能となった。2015 年 3 月の時点で、1 ～ 6 年生の登録制登録者数は、約 25,100 人まで増加している。1 校平均の年間参加児童数は、2013 年度 9,000 人、2016 年度 10,420 人であった。事業の推進は、公益財団法人（以下、公団）に委託されている。公団は、各校での実施内容の拡充、日々の運営を支援するとともに、運営主体である実行委員会との調整、スタッフ向け研修会の開催、事業への理解を深めるための広報活動などを行っている。

放課後子ども教室の開設時間は、おおむね夏季 17 時、冬季 16 時半までであり、活動内容は自主活動に加わえ NPO 法人や民間企業などの団体と連携し、工作教室、楽器体験、将棋教室などの体験プログラムを実施したり、図書室の活用も積極的に取り入れている。平成 26 年度に S 区の子どもおよび保護者を対象とした調査（2014）では、参加してよかったこととして、保護者は「他の学年と遊ぶことが増えた」「外遊びが増えた」「友達が増えた」などを挙げ、子どもの回答は、「外で遊ぶことが増えた」「友達が増えた」「他の学年と遊ぶことが増えた」の順になった。保護者と子ども両者の満足度は高く、放課後子ども教室の事業目的である社会性、自主性、体力向上、学習意欲、生活リズムのそれぞれで満足したという結果が示された。このように放課後子ども教室は、S 区の子ども達の放課後の居場所として根付いているといってもよいであろう。

スタッフの人材育成

放課後子ども教室は、地域の大人との交流も目的としている。そのため、見守りスタッフも地域の大人を想定している。S 区のように区内全校 69 校において放課後子ども教室を展開する場合、そのスタッフの数も膨大なものとなり、スタッフの人材確保に加え、スタッフ育成が重要課題となる。

先行研究より、放課後子ども教室にかかわるスタッフは、やりがいを見出しており、北原・斎藤・

蓮見・生駒・川嶋（2015）の調査では、新しい取り組みの意義・やりがい・肯定的な子ども観などがスタッフの語りからも示されている。同様に、西村（2013）の調査では、スタッフが仕事を通して自ら成長しており充実感を持っていることが明らかとなった。

一方で、スタッフが抱える課題としては、子どもに関する知識不足、特別支援への対応の必要性（田中、2017）、問題意識が高すぎる点（北原・佐藤・蓮見・生駒・川嶋、2015；北原・柴田・蓮見・川嶋・浅井、2009）、パート感覚（猿渡・佐藤、2011）が指摘されている。例えば、問題意識が高すぎるという点については、「子どもはみんな良い子」と思いこみ、「お役に立つ」意識が強すぎて、失望する場合がある（北原ら、2015）。また、肯定的認識が先行する中では、問題や困りごとがあったとしても率直に語りにくいことが指摘されている（北原ら、2009）。パート感覚とは、放課後子ども教室の社会教育的意義を理解しておらず、身近なパートとしての感覚で携わっている問題が指摘されている（猿渡・佐藤、2011）。

これらの指摘を受けて、放課後子ども教室のスタッフへの支援としては、1)活動の意義の啓発（猿渡・佐藤、2011）、2)気になる子どもへの対応助言（田中、2017）、3）活動中の困難へのサポート（北原、2015）が考えられる。1)の活動の意義の啓発について、猿渡・佐藤（2011）は、スタッフの中には、活動が子どもにとっての地域とのつながり形成という社会教育的意義を理解していないものが見受けられることから、細かな教育的技術よりも事業の趣旨や意義を中心に理解してもらうような研修内容を提案している。2)の気になる子どもへの対応助言については、放課後子ども教室には、気になる子どもも一定数活動に参加していることから、その基本的な対応や理解の方法の学習も不可欠である。3)の活動中の困難へのサポートについては、北原ら（2015）は、謝礼額を増やすといった経済的支援よりも、活動の中で出会う困難を受け止め軽減する支援の必要性を述べている。

スタッフのサポートや人材育成の難しさは、多くの現場で同じ課題を抱えている。スタッフのサポートは、通常コーディネーターが担うこととなる。事業と地域とを結びつけるコーディネートを実質的に果たしているコーディネーターが存在する自治体は数少ない（猿渡・佐藤、2011）。一方、S 区の公団はコーディネーターとして地域と事業を結びつけるために様々な工夫を行っている。公団の人材育成の特徴は、①学校・実行委員会との話し合い、②巡回サポート、③研修が挙げられよう。はじめに①の学校・実行委員会との話し合いは、1 校あたり年間約 10 回となっており、月 1 回程度の会議が開催されていることとなる。②の巡回サポートは、1 校あたり約 48 回であり、こちらも毎週 1 回以上の巡回が実施されていることとなる。つまり、スタッフは週に 1 回は巡回サポートのコーディネーターに困っていることを相談でき、そこで挙がってきた情報は運営会議や学校との連携の中で共有していくことができるのである。そして③の研修であるが、活動意義の啓発や子どもの接し方など様々なテーマについて年数回のスタッフ研修を実施している。

以上のように、S 区では、開設から 10 年にわたり会議・研修・巡回サポートという 3 つの方向による人材育成を実施してきたことで、スタッフ間での問題解決力も形成されてきている。勿論スタッフには入れ替わりがあることや子ども達は、日々不特定多数利用するために、研修や巡回があったとしても悩み感は尽きないであろう。そこで、本研究では、現在スタッフが抱えている困り感を明らかにすると同時に、スタッフ自身が困り感に対してどのような工夫を行っているのかという問題解決の方法について、探索的に検討することを目的とする。

2. 方法

手続き：放課後子ども教室の研修実施時にアンケートの趣旨を説明した。アンケートは任意回答であること、データは学術的な利用を行うことなどを口頭で説明し同意を求めた。

対象者：放課後子ども教室の研修に参加したスタッ

フ 65 名（男性 5 名、女性 57 名 , 不明 3 名）、年齢は 30 代 2 名、40 代 15 名、50 代 19 名、60 代 11 名、70 代 11 名、80 代 1 名であった。対象者の活動平均年数は 5.05 年（*SD* 3.25）であった。

期間：2017 年 6 月 9 日、7 月 7 日

分析方法：分析では以下の 4 つの過程を経た。①自由記述の内容をローデータとして作成した。②ローデータを精読し、記述内容をエピソードごとに書き出し、2 名の評価者が個別にエピソードを評価し、その評価結果をもとに分類を行った。③分類されたエピソードを「概念」とし、類似の概念を集めたものを「カテゴリー」とした。

倫理的配慮：記述内容は研究にのみ利用することを伝え、自由意思により提出を求めた。

3. 結果

分析の結果、「放課後子ども教室の活動で困っていること」について、7 つのカテゴリーと 29 の概念を生成した。表 1 に概念とカテゴリーおよび概念生成のもととなった発言の具体例を提示する。また、以下に 6 つのカテゴリーをストーリーライン形式で説明する。なお本文および表 1 では、カテゴリーを〈〉、概念を【】にて表記する。

スタッフの困り感

< 子どもへの対応の仕方 >

放課後子ども教室は、現在全学年の様々な子ども達が不特定に遊びに来る場所となっている。成育歴や家庭環境など様々な背景を抱える子ども達や特性を持つ子ども達への対応が求められ【子どもの背景や特性を踏まえた個への配慮の難しさ】をスタッフは感じている。特に多動気味の子ども達は、様々な場所や教室に動いていくために対応の難しさを感じている。大勢の子ども達の名前を覚えたり、大勢をどのように遊ばせるのかなど【集団対応の難しさ】が生じる。またその集団の中で、忘れ物への対応、物の紛失への対応、個別の貸し出しへの対応、学習優先の子どもへの対応など、【集団の中での個への対応】が求められることなどに難しさがある。

< 問題行動への対応の仕方 >

様々な背景や特性を持つ子どもに対応する際、子ども達は、素直に指示に従うばかりではない。放課後子ども教室のルールを破ることもあり、【ルール違反の際の注意の仕方】にスタッフは戸惑うことが多い。放課後子ども教室の物をかくしたり、大切に物を扱わないなどの行動が気になるようであった。このようにルールを破る子ども達に対しては、スタッフが注意をしても【反抗的・乱暴な態度】をとる子どももいるため、困ることもある。

< 運営上の難しさ >

子ども同士の喧嘩や、いじめが疑われるような【子ども同士の関係性への対応】にも難しさを感じている。その他にも【怪我への対応】や集団の【遊ばせ方の難しさ】を感じている。遊ぶだけではなく、片付けも大切な行為だが、なかなか徹底して指導することは難しく【片づけ】【忘れ物への対応】【個人物の紛失への対応】【道具の管理】は運営の課題として常に挙がっている。安全の見守りがスタッフの役割であるので、全体の【人数把握】が大切となるが、自由度が高いため人数把握も労力がかかる。

< 環境面での難しさ >

みんなで遊べるように、遊びのエリアを分けるなど【場所区分の難しさ】や、夏場は、熱中症の問題などもあり、【環境の温度について】気にかけている。加え、学校に工事が入ると、普段使っていた遊ぶ場所が使用不可となり【場所の確保の問題】も考えないといけなくなる。

< スタッフ間の問題 >

放課後子ども教室は、有償ボランティアのスタッフに支えられている。しかしスタッフは年齢も経歴も異なるため、【スタッフ間の人間関係】にも様々な出来事が影響する。昔からのスタッフや活動日数の多いスタッフの発言権が大きくなることもある。それぞれのスタッフが大切にしているものが異なるため、【スタッフ間のルールの統一】や【個への対応と全体への対応のバランス】が難しく、その原因としては【スタッフ間の価値観の違い】が影響している。本来ならば、リーダー、サブリーダーが中心

表１　スタッフの困り感の分類内容

カテゴリー	概念	具体例
子どもへの対応の仕方	子どもの背景や特性を踏まえた個への配慮の難しさ	・いろいろな性格や家庭環境で育った子どもたちを、それぞれもどのように接していったらよいかを考えることがある。 ・多動の子どもが校外に出ていきそうになるなど、目が離せない。
	集団対応の難しさ	・大ぜい来た時にどの様に遊ばせたらケガなく遊ぶ事が出来るのか。 ・日によって参加人数が異なり、人数の多い時に子どもたちの話を充分に聞いてあげられない。 ・子どもの名前を覚えるのに時間がかかる。
	集団の中での個への対応の難じさ	・個人の名札のバッチをつける箇所（腰に穴があくからズボンのポケットとこに着けてる、Tシャツ etc の首元にはさんでいる）に手間がかかる。 ・室内で工作する時、ハサミ、セロハンテープ、のりの貸し出しが個々で言ってくる。 ・学習を優先きせなければいけない子どもの参加。 ・見守り以外の（宿題）要望への対応の難しさ（宿題を教えてと言われるなど）
問題行動への対応の仕方	ルール違反の際の注意の仕方	・子どもが 1 ケ所でまとまって遊んでいるときに、三名のスタッフで見ていて、一人の子が次から次へと禁止された遊びをして、それぞれが注意をしても、全く聞く耳を持たずに自由にしている子がいる。 ・物を大切にしない、物をかくすなどの行動への対応。
	反抗的・乱暴な態度（言葉遣いも含む）への対応	・言葉使いが悪い子ども。 ・子ども達のことばが乱暴な事、何度注意してもゆうことを聞いてもらえない。
運営上の難しさ	子ども同士の関係性への対応	・いじめっぽく感じる時の対応。／子ども同士の喧嘩の仲裁が難しい。 ・遊具などバスケットの取り合い。
	怪我への対応	・ケガやケンカの対応を全員でできるようになってほしい。
	遊ばせ方の難しさ	・楽しく遊ばせるには！と考える。
	片づけ	・遊具の片づけが出きない時が多い。
	忘れ物への対応	・忘れ物が多い。
	個人物の紛失への対応	・名札をよくなくす子がいる。 ・上履きがなくなるなど個人の物品管理の難しさ。
	人数把握	・子どもがどの場所で遊んでいるか分からない。
	遊具（おもちゃも含む）の管理	・おもちやの管理、校庭で遊ぶボールの管理等。
環境面で難しさ	場所区分の難しさ	・遊びエリア。図書室へ男性が行かないので、女性の少ない日は困ることが多い。
	環境の温度について	・校庭に於ける温度について。
	場所の確保の問題	・今年度、1 年生がこれまでになく大勢入学して、参加人数も増えていることで、特に待機時間（委員会などで）がとても混乱してしまう。
スタッフ間の問題	スタッフ間のルール不統一	・全員が同じ方向を同じ姿勢で児童と接してほしいが、児童に対して自分の都合で判断されると困る。
	情報共有の難しさ	・スタッフ間のコミュニケーションとるのが大変。 ・スタッフ間の情報共有が難しい。
	スタッフ間の人間関係	・なれてきたスタッフ、多くシフトに入っているスタッフの意見が強く通るようになってきた。
	スタッフ間の価値観の違い	・スタッフの動きやすいルールが細かく設定されるので昔のおおらかさがなくなってきて学校の延長になってきていると感じている。そういう人たちは安全第一を考えているので、とてもよくわかるが、考え方のギャップに苦しんでいる。 ・自分で何とかしなければと考えるスタッフと誰かに話してその人に対応してもらいたいと考えるスタッフ。 ・年齢、考え方もバラバラ。急に変更されていたりする。
	役割分担の難しさ	・リーダー、サブリーダーの役割。
	個への対応と全体への対応のバランス	・子ども達が個人的に関わろうとする場面が多く、かかりきりになってしまうと全体が見れないこと。
	スタッフの人数	・スタッフの数が減少してること。 ・男性スタッフが少ない（いない）こと。
	スタッフの適正の見極め	・ボランティア意識がある方でないと困る。
スタッフ自身の課題	スタッフの体調	・遊ばせる場所が夏は暑いので子どももスタッフも熱中症にならないように選ぶのが毎回悩む。 ・足を痛めてから歩くのが遅くなってしまい、皆様と一緒に進むことが出来ない事。
	スタッフとしての自信のなさ	・あまり大きな声が出せない。
	自宅と仕事とのバランス	・自分の子どももいるので限られた時間での仕事。
他機関との連携の難しさ	学校とのコミュニケーション不足	・新しい副校長先生とのコミュニケーションが難しい。
	他の団体との関係性	・三団体の中での活動です。話し合いの時間が少ないため。

となって問題解決を図らないといけないが、リーダーなどの【役割分担の難しさ】や【情報共有の難しさ】が常に課題として挙がる。その上、【スタッフの人数】も不足気味であり、スタッフ募集が鍵となるが、子どもと関わる大切な仕事であるため、誰でもよいというわけではないので、【スタッフの適性の見極め】も重要である。

< スタッフ自身の課題 >

S 区の放課後子ども教室は、10 年を迎える。このことは、例えば、60 歳でスタッフをスタートした人が、今や 70 歳となることを意味する。様々な体調不良が生じることは当然であり、足腰の痛みなどの【スタッフの体調】も気にかけないといけない。また【自宅と仕事のバランス】も大切である。その他にもスタッフを初めて行う人は、大きな声を出すことが苦手だったりと【スタッフとしての自信のなさ】を感じることもあるが、回数を重ねることで自信をつけていき、スタッフとしての成長が見受けられる。

< 他機関との連携の難しさ >

放課後子ども教室は、関わっているスタッフのみですべて問題が解決できるわけではない。学校の中の空間を活用しているので、常に学校側とのコミュニケーションが求められる。しかし学校側が放課後子ども教室に強い関心を持ってくれているとは限らず、場合によっては【学校とのコミュニケーション不足】を感じることとなる。また、放課後子ども教室の場所を他の団体も使うことがあれば、【他の団体との関係性】も大切にしないといけない。しかし、時間の関係上話し合いの機会が少なくなっていることに課題を感じている。

スタッフの課題解決に向けての工夫点

放課後子ども教室のスタッフとして直面する課題に対して、どのように工夫して解決しているかに関するエピソードを 2 名の評価者が個別に評価し、その評価結果をもとに分類を行った。その結果「問題解決に向けての工夫点」に関しては、表 2 に示す通り、9 カテゴリー 43 概念に分類できた。

< スタッフに関する工夫 >

困ったことが発生した際、一人で抱え込まず、先輩スタッフに相談したり、仲間と状況を共有したりという【他のスタッフと相談、共有】によって、多くの問題が解決できている。その際、スタッフ間のミーティングが重要となると認識している。より意見が活発に出るように【会議運営の工夫】として、ホワイトボードに意見を書き込んだりしている。またお互い日々気づいたことを記録にとり【記録による情報共有】を行うことで、正確な情報を伝達するよう努めているスタッフもいる。スタッフ間で話し合った内容を実行する際は、一人で工夫するのみでなく【スタッフ間の連携】によりチームとしての解決が可能となる。それでもうまく行かないときは、【専門家・専門機関の意見の取入れ】を行ったり、【先生や学校への依頼】を通して援助要請を行っている。スタッフ間の関係性が最も重要であるために、面接を実施して【スタッフへのニーズの確認】をし、常日頃から【スタッフに対する感謝を伝えてる】などをお互い心掛けている。それでもどうしても価値観が合わない場合は、【価値観の違いとして割り切る】ことも必要な場合があるようだ。

< 子どもへの対応の工夫 >

放課後子ども教室に関する「困り感」で最も多かったものは、子どもへの対応についてだが、スタッフは、それぞれ様々な工夫をしていた。

何か問題が生じた際には、【話をよく聞く】ように努め、子どもに威圧感を与えないように、子どもの目の高さに合わせて対応するなど【場面に応じた対処】を心掛けている。複数の子ども間のトラブルの場合、まずは落ち着かせて、【一人ずつに話しを聞く】ようにしている。それでも興奮している時は、【場所を変えて話す】と有効な時もある。子どもが自己中心的な態度をとるときには、【相手の気持ちを想像させる】ような言葉かけを行なう。

ルールを守らない子どもに対しては、【何度も注意する】ことや【根気強く声をかける】ことを意識している。それでも指示に従わない時は、「先生に伝えるよ」と【第三者の介入予告】を行ったり、他

表２　スタッフ課題解決に向けての工夫点の分類内容

カテゴリー	概念	具体例
スタッフに関する工夫	他のスタッフと相談、共有	・自分が困ったり悩んだりしていることは、一人でかかえこまず、他のスタッフに相談したり、話を聞いてもらったりしている。みんなで話して、良い解決策を導きだすことや、課題を共有することが大切だと考える。
	記録による情報共有	・トラブルがあった時のことを専用のノートに記録し、学校側やスタッフ間で情報共有できるようにする。必要があれば保護者にも説明できるようにしている。
	スタッフ間の連携	・フォローできる部分はフォローし合う。まずはリーダー、サブリーダーで話し合う。
	専門家・専門機関の意見の取入れ	・Ｓ区と連携する。
	先生や学校への依頼	・どうしても解決しないときは先生方に協力をお願いする。
	会議運営の工夫	・スタッフ会議の時に確認する際、ホワイトボードに書き込む。
	スタッフへ感謝を伝える	・細かく対応して下さっているスタッフさんへ常に感謝の言葉を伝えている。
	スタッフのニーズの確認	・スタッフと面接をリーダーと行う。
	価値観の違いとして割り切る	・私はよほどのことでない限り先生に言いつけるのは好きではない。すぐに先生に言いつける人がいるが考え方が違うと思い割り切っている。
子どもへの対応の工夫	場面に応じた対処	・目の高さに合わせて声を掛けたり、分かりやすく、なぜしてはいけないのかを話しかけるが、全くの無理な場合は、リーダーへ報告する。
	話をよく聞く	・目を見て話しを聞くようにする。
	メモにチェックする	・メモを持ち歩き必要な時はすぐに記入する。
	何度も注意する	・何度も注意して聞きいれてもらった。
	一人ずつに話しを聞く	・子ども同士のけんかの時はなるべく両方の話を聞き、帰るまでには仲なおりが出来る様にしている。 ・まず落ちつかせ、一人ずつ話を聞く。
	根気強く声をかける	・根気よく声を掛ける。 ・何度もルールを説明して、守るように話す。
	解決の促し	・スタッフは教えられないと答え、友だちに聞いてみなさいという。 ・子どもと一緒に解決案を見つけて決める。放果課の補習教室や担任の先生と連けいをとって学習を優先させるようにしている。
	第三者の介入予告	・最終的には、先生、保護者に連絡を入れるよ…と言ってしまっている。 ・スタッフが入っても解決しない場合は、「先生を呼んで話し合おうか?」と話すと、素直に謝り、ケンカ相手と遊び始める（他に良い方法はないか）。
	場所を変えて話す	・相手全員を別の場所でなるべく冷静に言いきかせる。次回同じ様な行為があった時のことまで話す。
	相手の気持ちを想像させる	・同じ言葉で言い返して、いやな思いをしなかったか?と問う。 ・暴言を吐かれた相手の気持ちがどんな気持ちか考えてみてと問う。思いやりや想像力をつけさせてあげたくて、例えばアリをつぶす遊びをする子にはアリさんにもあたなと同じようにお母さんがいて家族がいることを想像させる。
	遊び相手になる	・少し相手をすれば、又、皆の所にもどって行く。なるべく相手にしようと思う。
	褒める	・出来たら当たり前だけどほめる（おだてる）。 ・ほめる事から始める（ありがとうを忘れない様）。
	見守りながら危険な時に声かけ	・しばらく様子を見て、あぶないと思った時点で中に入る。
	子どもを理解しようと努める	・他のスタッフに確認する（その子の性格、普だんの行動）
	多方面からの対応	・いろんなスタッフに対応してもらう。Ｓ区の方から注意してもらう。
関係性の構築	挨拶をし続ける	・声が出せない子どもはいるので、目を見てうなずけば喜んでみせる、元気な子にはあいさつするまで目をみて声をかけつづける。
	関心を向ける	・声をかけながらいつも見ていることをアピールする。
	名前を覚える努力	・日々接触して覚えるようにする。特徴あるものをみつけて覚えるようにする。 ・ガムテープに名前を書いて、貼る。
	声かけ	・声かけを多くするようにした。
現場調整	おもちゃの分類の仕方を工夫	・終了前の少し早めに声をかけて遊ぶのを徐々にやめさせる。トレーの中にハサミ、セロハンテープ、のりをセットを 5 個用意し、番号をつけて貸し出しノートを作り、使用する時は貸し出しノートに記入し、返却時はスタッフはチェックするようにした。 ・ジップロックを用いたおもちゃの分類。
	場所の区分の工夫	・体育館での遊びで高学年がドッヂボール低学年がバスケをしていた時にぶつかってしまい、低学年の子どもが倒れてしまったので、その後、卓疎台で仕切りをして遊ばせるようにした。
	おもちゃの数の工夫	・1 年生は体育館でも混みあって危ないので、ボールなどの遊具は出さないことにした。
	おもちゃの素材の工夫	・体育館使用の時は、柔らかいボールを使う（低学年の危険防止）。
	場所の調整	・空いている教室を学校側からかりてあばれないで遊べるゲームをみんなでやっている（ボーリング、玉入れ、手あそび） ・教室の時　体育館…時間を決めて順番にみんなでできる遊び（体育館の遊具は出さないで）。 ・委員会待機中に借りられる場所を学校に相談して決めた（体育館）。
	人数把握の工夫	・リストバンド（学年カラー色別）を使用する ・預かる場所を決めて自分達で管理する。
情報提示の工夫	目で見える形での片づけ工夫	・かし出しボードを作り名前を書かせる。 ・ボールに番号をつけて、ホワイトボードに名前、番号を記入して貸し出している。 ・『忘れ物ボックス』を用意。終了時に職員室前の子どもの目につきやすい場所に置いていく。開催時は受付前に置く。長く取りにこないものは学校に引き渡す。 ・水筒置き場を作る。
	耳で聞こえる形での情報提供	・ふえの活用。
ルール統一	ルール確認、見える形での工夫	・数日前より児童館のやり方を害参考に、25 分遊んだら 5 分の水分補指をとるというプラカード（かん板）を作り、ホイッスルを吹くと同時にプラカードをかかげる様にしたところ、ほとんどの子どもが従うようになった（視覚で訴える）。
	使用禁止のペナルティ	・再度話かかけても片付けない時は、その遊具をしばらく使用禁止にした（片付けないので、使用禁止にした）。 ・見つけたらイエローカードをだす。イエローカード 2 回でレッドカード。
危機管理	熱中症対策	・あまりにも汗がすごい子、タオルを持っていない場合、キッチンタオルで対応、15 分～ 30 分おきに水分を取るように声かけ。校庭の場合、なるべく日かげで遊ぶように声かけ。 ・学童室で足立区からの連絡があり、それを参考にしています（温度）。 ・笛を吹いて子ども達を集めて涼しい場所で休ませる。水筒もしくは水道水を飲ませる。
	怪我への対応	・エプロンに手袋を入れておく。
自身の体調管理等	自分の体調管理	・自分なりに歩いている。
	子ども達へ自分たちのことを説明	・親と一緒に暮らしているので、年をとった人をみてないから子ども達に自分達の現在の姿、希望等話をする（スタッフが年齢が高いので）。
専門性の向上	ことばの勉強	・言葉の問題は出来るだけみんなで話をしてスタッフも日本語以外を少々勉強した（各自プリントを見て）。

の関係者からも声かけをしてもらうなど【多方面からの対応】を行うこともある。

常に気になったことは【メモにチェックする】ことで、気づいたことが共有化できる。日々の中で【子どもを理解しようと努める】。そして、子どもの様子を【見守りながら危険な時に声かけ】を行っている。友達と関われずスタッフにまとわりつく子どもに対しては、少し【遊び相手になる】と、落ち着いてみなのところに戻っていく。また子ども自身に困ったことが起こった際【子ども達と一緒に解決方法を見つける】ように努力したり、【解決の促し】を行ってみたりする。そして子どもたちの小さな変化を見つけては【褒める】よう工夫している。

< 関係性の構築 >

子どもたちの問題に対応する際、その前提として子ども達と関係性の構築が出来ていることが重要である。そのためにはスタッフから【挨拶をし続ける】ことや【声かけ】を行い、【関心を向ける】努力をしている。そして大勢の子どもたちの【名前を覚える努力】をすることで、子ども達と信頼関係を作っていっている。

< 環境調整 >

子ども達への対応を工夫するのみでなく、環境調整を行うことで、落ち着いた活動ができることもある。ジップロックなどで【おもちゃの分類の仕方を工夫】したり、喧嘩が発生しにくいように【場所の区分の工夫】や【おもちゃの数の工夫】をしたり、そして、当たっても痛くないように【おもちゃの素材の工夫】を行っている。学校が行事や工事などで教室や体育館が使えない時も空いている部屋を借りたりなど【場所の調整】も行ない、さらに【人数把握の工夫】としてスタッフの立ち位置や学年ごとにリストバンドを付けたりする工夫も行っている。

< 情報提示に工夫 >

情報提示の工夫としては、貸し出しボードを作ったり、「忘れ物ボックス」を作ったりと、【目で見える形での片づけの工夫】を行っている。また注意を促す方法として、笛を活用することで【耳で聞こえる形での情報提供】なども工夫している。

< ルール統一 >

遊ぶの中では、様々なルールが必要となる。そこで、看板を作るなど【ルール確認、見える形での工夫】を意識した。それでもどうしてもルールに従わない場合は、禁止事項を作りおもちゃの【使用禁止のペナルティ】を実行している。

< 危機管理 >

危機管理も重要な任務である。水分を補給させた【熱中症対策】や【怪我への対応】としてエプロンに手袋などを入れておく工夫をしている。

< 自身の体調管理等 >

スタッフを継続するためには、【自分の体調管理】も重要である。膝が痛い場合、自分なりに歩くように心がけている。また年齢が高いスタッフのことを理解してもらうためにも、自分たちから【子ども達へ自分たちのことを説明】している。

< 専門性の向上 >

様々なバックグランドを持つ子ども達が放課後子ども教室にはやってくる。その中には、日本語がうまく話せない国籍の子ども達もいる。そのためにプリントなどを見て【ことばの勉強】を行い、子どもと関係を持てるよう工夫している。

4. 考察

本研究は、放課後子ども教室のスタッフが感じている困り感と問題解決に向けての工夫について分析してきた。

はじめに困り感についてだが、子ども達の問題行動への対応とともにスタッフ間の問題が大きかった。現在S区の放課後子ども教室には、大人数が登録しており、いつでも利用可能となっている。様々なバックグランドを持った子ども達への個別配慮が求められると同時に、子どもの問題行動への対処の難しさが伺えた。子ども達は放課後という解放された中で、のびのびと振舞うため、その分甘えや依存、自己中心性が生じやすい。これらの子どもの欲求を組み入れながらも、集団としての秩序も必要となる。特に、暴言、ルール違反、片づけへの対応、子ども同士の喧嘩への対応へ苦慮が見られた。この点は他

の放課後子ども教室も同様の課題を抱えている（西村、2013；猿渡・佐藤、2011）。

子どもへの対応とともに困り感として挙がったことは、スタッフ間の連携であった。例えば子どもの不適切な対応に対する理解の仕方、対応方法の仕方、その前提となる教育的理念の違いなどが見られた。元森（2006）は、子どもとの関わる大人の態度を「子どもらしさを尊重して守るとする視線」（以下、尊重の視線）と「大人へ水路付けしていこうとする視線」（以下、水路付けの視線）に分類している。白坂（2016）は、放課後子ども教室のスタッフへのインタビューを通して、スタッフは自由を尊重することを意識しても「水路付けの視線」によって葛藤が引き起こされてしまうことを示した。「尊重の視線」「水路付けの視線」両者ともに、学校教育や家庭教育をはじめ様々な経験により形成されているため、価値観の葛藤は、スタッフ間でも起こりやすい。経験に裏付けられているからこそ、価値観の否定を人格の否定としてとらえスタッフ間に溝ができてしまうこともありうる。白石（2016）は、活動の前に葛藤や困惑が存在することに対する研修の機会も必要であると述べている。また、困り感の中には、少数であるが保護者への困り感も挙がった。すなわち怪我をした際の対応など保護者からクレームを受ける場合も生じる。「預ける」意識の保護者（猿渡・佐藤、2011）が増加し、ボランティアスタッフに「預けた責任」を過度に求めているようであれば、放課後子ども教室の意義も含め保護者への意識付けが必要である。

以上、困り感も多く示されたが、それに対して様々な問題解決に向けた工夫も挙げられた。解決の工夫点としては、子どもへの対応や環境調整の種類の多さが特徴として挙げられる。子どもへの対応に関しては、その前提として、関心を向けたり、名前を覚えたりという関係構築に力を注ぎ、子どもへの対応に関しては、個別対応、他者理解の促し、自己解決の促し、継続的な声かけなど多岐にわたっている。その他にも、環境調整としての情報提示の仕方、空間配置の工夫など様々な工夫が示された。成人を対象としたコーピング尺度は（影山・小林・河島・金丸、2004）、問題中心対処と情動中心対処から成り立っているが、今回の工夫点の内容を見てみるとスタッフ間で話し合いを行うことで現場での問題を解決する問題中心対処と情動中心型対処の両方の利用が可能になっている。問題解決を支えるためにはスタッフ間のチームワークが鍵となる。そこで、スタッフ間の連携を深めるために、会議を行うにあたり、スタッフの面接を行ってニーズを確認したり、会議中はホワイトボードを使って自由に意見を交換できる仕組みを作ったりなどの様子が見られた。ボランティア活動という類似点がある外国人生徒教育場面で第三者の研究者と保護者ボランティアによる外国人生徒の支援では、協働による支援活動を通し、生徒への理解がより促され、新たな支援可能性が展開され、子ども同士の関係も変容している（内田、2004）。放課後子ども教室でもファシリテーターとスタッフの協働により多面的な支援が構築されることとなったのであろう。

今後の課題

S 区の放課後子ども教室の課題としては、人材確保の問題と学校や保護者への啓発活動が挙げられる。はじめに人材の確保についてだが、現在スタッフの年齢は高齢化しており、自身の体調不良などスタッフの健康にも配慮が必要となってきている。若い層のスタッフをいかにリクルートできるか、または地域とのかかわりがない新興住宅地の人や企業の協力をどのように得ることができるかが今後の課題となり、広報の仕方を含め、検討の余地がある。

次に学校や保護者への啓発活動についてだが、放課後子ども教室の活動内容への理解は、学校ごとに差があるようであった。学校側のキーパーソンは副校長となることが多いため、まずは副校長および校長に放課後子ども教室の意義を伝えていく必要がある。また保護者に対しても単に預ける場所というような認識ではなく、子ども達の成長にとって放課後子ども教室が与える意義を伝え、その場を支えているスタッフの存在意義を第三者である専門家の力を借りながら啓発していく必要があろう。

5. 引用文献

足立区生涯学習振興公社（2014）．平成 26 年度「あだち放課後子ども教室」アンケート調査結果について <2017,9,19>
http://www.kousya.jp/tokimeki/wp-content/uploads/sites/2/2014/11/51acedd2d786add0089e015444df1e71.pdf#view=FitV

影山隆之・小林敏生・河島美枝子・金丸由希子（2004）．勤労者のためのコーピング特性簡易尺度（BSCP）の開発：信頼性・妥当性についての基礎的検討　産業衛生学雑誌，46(4)，103-114.

北原靖子・佐藤哲康・蓮見元子・生駒忍・川嶋健太郎（2015）．ボランティア活動継続に寄与する諸要因の検討ー放課後子ども教室地域サポーターの語り事例からー川村学園女子大学研究紀要，26(1)，101-119.

北原靖子・柴田恵江・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘（2009）．放課後子ども教室に参加する地域の非専門家による語り(1)：動機・やりがいについて　日本教育心理学会総会発表論文集，51，194.

国立青少年教育振興機構（2017）．子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究 . 国立青少年教育振興機構.

文部科学省（2016）.「学校・家庭・地域の連携協力推進事業」及び「地域の豊かな社会資源を活用した土曜日の教育支援体制等構築事業」実施状況 <2017, 9, 19>
http://manabi-mirai.mext.go.jp/assets/files/H28jissijoukyou/28jissijokyo.pdf

元森絵里子（2006）．子どもへの配慮・大人からの自由ープレーパーク活動を事例とした「子ども」と「大人」の非対称性に関する考察　社会学評論，57(3)，511-528.

内閣府（2013）．平成 26 年版　子ども・若者白書 <2017, 9, 12>
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf_index.html

西村芳彦（2013）．放課後子どもプランにおける放課後子ども教室の課題：中核市千葉県柏市の事例を中心にして　早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊，（20-2），209-219.

猿渡智衛（2016）．地域における子どもの放課後の居場所づくりに関する基礎調査Ｉ－神奈川県における全県調査結果をもとにー弘前大学大学院地域社会研究科年報，12, 37-55.

猿渡智衛・佐藤三三（2011）．放課後子ども教室事業の現代的課題に関する一考察ー子どもの社会教育の視点から　弘前大学教育学部紀要，106, 47-61.

澤瀬崇（2017）．地域の教育支援と学校改善に関する試論：掛川市放課後子ども教室「はぐくらぶ」を事例として　教育実践高度化専攻成果報告書抄録集，7, 7-12.

白坂正太（2016）．遊び場における子どもの尊重と大人の葛藤ー「子どもらしさの尊重」と「大人への水路付け」に着目してー　こども環境学研究，12(3)，37-43.

田中礼子（2017）．放課後子ども教室における特別支援教育の在り方について：子ども・地域住民・教師との関わりを通して　教育実践高度化専攻成果報告書抄録集，7, 109-114.

内田紀子（2004）．保護者ボランティアと研究者の協働による支援活動：外国人生徒教育現場での試み　茨城大学留学生センター紀要，2, 73-83.

（本研究は JSPS 科研費（17K04644）の助成を受けたものである）

（とうご　えつこ）東京未来大学
（いわさき　さとし）東京未来大学